

る遺品の「商品」としての処分である事、唱衣の実施による物品の交換・売買については死者と大衆の間に叢林が介在する事、が確認できる。ここから、唱衣とその実施に関しては、死の实在の表象という危険性を回避するとともに、送葬完了後の共同体秩序の回復を目指す過程において、死の表象を転換し、叢林全体から排除するための仕組みの一つと考える事も出来よう。

また、唱衣は贈与ではなく、遺品を貨幣と交換する場である。貨幣を媒介とした交換には人格や社会関係が不在である指摘される点からも、唱衣においては死者への負債感覚を持たなくて済むとも考えられる。また、死の实在を表象する遺品の交換という文脈においては、商品交換の形態を取る事が、二次葬完了後に再統合後される共同体において死の危険性を回避する仕組みだという見方は可能であろう。遺品が姿を変えた貨幣は唱衣による収入となり、「修行の場」である叢林内に配分されることにより、その経営維持に寄与する結果となる。

ここから、死者の骨化以後、二次葬開始以前に行われる遺品競売としての唱衣とは、共同体が再統合へ向かう過程において、死の实在を表象する行き場のない遺品を、貨幣を媒介として処分することにより、新たに再生する共同体の構成要素として安全に環流させる装置の役割を果たすと共に、唱衣による収入を、僧侶たちの「修行の場」たる叢林の維持という聖なる役割へと変換しうる結節点であったとも言えるのではなからうか。

遺影奉納と死者の追悼

——岩手県宮古市のある寺院の事例から——

山田 慎也

本発表では、岩手県宮古市のある寺院別院に奉納された遺影の悉皆調査から、遺影の成立と死者の属性について検討することを目的としている。発表者は、近年、継続的に岩手県を中心に寺院に奉納された絵額や遺影について調査を行ってきた。ここでは、遺影がどのように成立し、使用されてきたかを検討することによって、現在では死者の表象として重要な要素となっている遺影について考察するためである。

さて、岩手県下ではひろい範囲で、菩提寺に遺影を奉納する習俗がみられ、寺院本堂下陣や回廊の上部壁面などには、何段にも遺影が並んで掲げられていた。しかし、本堂の新築や改修などを期に、こうした額をはずす寺院も多く、今ではこうした光景を見ることができず寺院も数少なくなっている。

こうした遺影の奉納習俗については、いまのところ岩手県中部とその他の地域では、その展開が異なっていることが次第に明らかになってきた。県中部の北上川流域、盛岡から北上、花巻地方、また遠野盆地を中心とした地域では、遺影写真を奉納する以前、近世末期から大正期にかけて、絵馬のような大型の絵額を奉納していたのである。これは浮世絵風の図像と彩色で戒名や没年月日とともに死者の姿を描いたものであった。そして明治後期になると絵額の奉納が次第に減少していくのに対

して、次第に遺影写真や写真のように似せて描いたモノクロの写真の遺影を奉納するように変化していったのである。

それに対し、岩手県沿岸部などでは多少例外はあるが、こうした絵額のようなものはほとんどみられず、写真のように描いた写真画や遺影写真が奉納されるようになっていく。今回はその事例として、宮古市鉾ヶ崎の常安寺別院に奉納された遺影を取り上げる。常安寺は宮古市内で最も檀家を抱える曹洞宗の大寺院である。鉾ヶ崎は港町として、流通や漁業の拠点として商家や歓楽街もありかつて繁栄した地であり、その地域の寺院として別院があり、人々の葬儀や供養の場となっている。

現在、明治以降の死者の遺影二八一枚があり、最も古い没年は明治三九年の死者の写真の額である。写真画や写真、油絵などもあるが、圧倒的に写真が多い。奉納の目的は「為菩提」「為霊」と死者の供養を目的としており、また第二次大戦前までは、夭折、海難、軍人などの遺影が多い。また絵額同様、一枚の額に複数の死者を合わせたものがあり、それは親子や兄弟と思われる者が多い。

さらに興味深いのが、遺影を奉納する人を「納人」といつているが、納人が複数となり、遺影の下などに記されているもの比較的多いことである。こうした複数の納人の遺影は、昭和十七年の死者のものまでが見られ、この年まで四五人の死者の遺影があり、内二五枚が複数の納人によるものである。納人は死者の遺族、親族だけでなく、同級生や軍の同期、学生などであり、追慕だけでなく、仲間の死を恐れ、慰撫する目的もあったとも思われる。さらに故人が軍人や先生の場合、顕彰的側面

もあつた。一方、遺影だけでなく葬儀写真の額が二枚あり、死者を追悼するためにつくらえた葬列絵巻やその後の葬儀写真集との関係をうかがえるものもある。

以上のように、県中央部や遠野盆地などの絵額、遺影奉納の影響を受けながら、死者の慰撫と顕彰を行うために、遺影を製作し奉納するという慣習がこの地域にも成立し、第二次大戦後にはさらに展開していったことがわかる。その頃になると、葬儀における遺影の浸透とともに、その対象は特別な死者だけでなく、一般的な供養の一貫としても行われていったのである。

奄美・南薩地域と戦争死者慰霊

——戦局環境複合の慰霊論に向けて——

西村 明

本発表では奄美群島の徳之島における太平洋戦争の戦争死者慰霊を対象として、当の戦争死者が置かれた戦局のあり方や環境を視野に入れることで見えてくる新たな慰霊像に迫ることを試みる。

明治大正期までは、軍事的に重視されていなかった南西諸島は、日本の統治下・占領下に入った太平洋諸島や東南アジア島嶼部とともに、一九四〇年からの武力南進の方針のなかでその重要性が高まり、奄美大島要塞は海軍の前進基地としての役割と、陸軍の南方の進出の中継基地という二つの役割が付与される。